P2-001

知的障害児におけるダンスエクササイズを取り入れた運動プログラムの効果

伊藤 由紀子^{1,2}、平元 泉²、大高 麻衣子²

¹秋田県 由利本荘市立 新山小学校、
²秋田大学大学院医学系研究科保健学専攻

【目的】

ダウン症、自閉症を含む知的障害を持つ特別支援学校中学部の生徒を対象に、日常生活における身体活動が低下しやすく運動習慣が定着しにくい知的障害児が楽しみながら運動が継続できるようにダンスエクササイズ (以下、ダンス) のプログラムを考案し、その有効性を活動エネルギー量およびダンス上達度スコアから検討することを目的とする。

【方法】

秋田県の特別支援学校1校に在籍する中学部生徒65名のうち、運動が奨励されており、保護者が参加を希望している36名が参加した。そのうち、音楽に強い拒絶感を示した生徒1名、集団行動が苦手などの理由で参加中止や欠席が多かった2名を除外し、33名 (男子15名、女子18名) を分析対象とした。学校のカリキュラムで「体力作りの時間」として設定されている朝の20分間を使用し、ダンスを平成25年11月～平成26年2月までの4か月間で22回実施した。使用する音楽はこだわりや集中時間を考慮し、アニメソングやアップテンポな曲を短時間に編集し、同じ曲目を同じ順番に使用した。加速度計 (タニタ社, カロリズム) 活動量計を装着しダンス中の活動エネルギー量 (以下、活動量) のデータとした。ダンスの場面をビデオ撮影し、そのビデオ画面を2名で分析し、10項目のダンス上達度スコア (以下、スコア) 5段階評定で評価を行った。分析方法は、活動量とスコアの月毎の平均値を算出し、一元配置分散分析で比較した。さらに、対象の性別、年齢区分別、障害区分別 (ダウン症・自閉症・その他)、BMI区分別について二元配置分散分析で比較した。

【結果】

活動量を4時期で比較した結果、11月より1月 ($p < 0.01$), 2月 ($p < 0.05$), 12月より1月 ($p < 0.05$) が有意に高かった。スコアは、11月より1月および2月 ($p < 0.01$), 12月より1月および2月 ($p < 0.01$) が有意に高かった。属性別の比較では、活動量では、女子より男子 ($p < 0.05$) が高かった。スコアではダウン症が自閉症より高かった ($p < 0.05$)。

【考察】

音楽や集団行動を苦手とする3名を除く33名が4ヶ月間のダンスに参加することができた。全体では、4か月間で活動量およびスコアが上昇し、ダンスの継続は身体活動として有効であると考えられる。障害の特性に配慮したダンスプログラムは運動を苦手とする知的障害児でも楽しめる活動であり、運動習慣定着のための支援として有効であることが示唆された。

P2-002

医療的ケアを受けながら通常学校に通学する子供と家族の支援に関する研究

ーボランティア看護師の支援の実際ー

矢野 芳美、佐々木 俊子、永谷 智恵

名寄市立大学 保健福祉学部 看護学科

【目的】

医療的ケアを必要とする子どもが、通常学校に通うためには、保護者、看護師の付き添いが必要となる。今回、通常学校で医療的ケアに携る看護師の子どもや家族の支援の実際を知り、求められている役割、課題を明らかにする。

【方法】

通常学校で医療的ケアを子どもに行う看護師を対象とし、半構成的面接を実施した。面接の視点は、登校から下校までの一連のケアの実際、保護者との連携や教育現場との連携、教育の場における看護師の役割、課題とした。得られたデータから逐語録を作成し、類似性、相違性に基きカテゴリーを抽出した。所属する研究機関の倫理委員会の承認を得て実施した。対象者には研究の主旨を説明し、参加の自由、途中辞退が可能、プライバシーの配慮等を口頭及び文書で説明し同意を得た。

【結果】

ボランティアで医療的ケアを行っていた看護師3名に面接を実施した。分析の結果は、サブカテゴリー数22、カテゴリー数5が抽出された。

看護師の子どもへの支援は、保護者の依頼を受け【決められた医療的ケアだけの関わり】になっていた。医療的ケアが必要な子どもを通常学校に通わせる前例がないため、通学できるまでの家族の努力を感じ、【通常学校を希望する家族を支え続ける】思いになっていた。しかし、進学などの現実にボランティア看護師だけではどうすることもできない、【看護師として子どもを支えたい思いと支えきれない現実】を感じていた。学校側の配慮や積極的に子どもに関わる教員と情報を共有することができた。しかし、教育の場では入っていけない領域【教育の場は第三者的な立場】であることを感じていた。通常学校で医療的ケアが必要な子どもが学べるためには、教育の場において、教育、医療、家族の連携の必要性を感じ、つなぎ役、マネジメントなどの子どもが【学校に通えるための看護師の役割のあり方】について模索していた。

【考察】

看護師は家族の支えとなり、医療的ケアの必要な子どもが他の子どもと一緒に学校生活を送れることを願っていた。しかし、教育の場では決められた医療的ケアだけを行う第三者的立場であり、疎外感や看護としての役割不足を感じ課題としていた。